

「新島先生、やりましたよ。京都・安中ウオーク」

文と写真 田島 繁 (元中学校教諭)

私は2009年2月13日、第166回新島襄生誕記念会で「新島研究功績賞」を受賞した。新島論文の審査委員や同委員長、「ボストン・アーモスト新島襄の足跡を辿って」の2度の企画・実行、08年10月新島研究会で発表した「新島襄の足跡を辿って」ヨーロッパ編の実地調査などが評価されたのかなと自己評価している。この受賞を励みとして、以前からやってみたいと思っていたことを2009年4月、企画し実行した。

それは、新島先生が明治15年(1882年)、今から127年前に教え子の徳富猪一郎(蘇峰)、湯浅吉郎(半月)、伊勢(横井)時雄、保坂七之介、奥亀太郎の5人と歩かれた「京都・安中ウオーク」

▽第166回 新島襄生誕記念会



前列左端が筆者

である。新島先生は7月3日自宅の新島旧邸から京都駅まで歩き鉄道で大津に、東海道線が未開通のため大津港から船で米原港まで行き、そこから馬車や人力車を利用しつつも両親が住んでいた安中まで365kmを9日間で歩き到着した。

私は同志社大学経済学部1年の時、松井七郎先生の授業「一般演習」で「[My Younger Days] をテキストに新島先生の生涯を熱く語られたことに刺激され、クラスの菅泰介、高橋正造と3人で「同志社精神研究会」を立ち上げた。2年後の1963年9月、菅君ら会員5人が「京都・安中中山道行脚」を実施し、お寺に泊めてもらいながら15日間で安中に到着した(同志社時報7号掲載)。私は同志

社教会で洗礼を受けた直後の青年会の修養会と日程が重なり参加しなかった。このことが何時も心にひっかかっていた。日本百名山踏破や世界7名峰に登り、また日本で一番ハードな1日50kmを3日間歩く「日本スリーデーマーチ」にも参加してきた私としては、定年退職後は非やってみない企画であった。

新島先生が歩いたコースを正確に知るため、①「新島全集」5巻の旅日記「日抄」を大学図書館で読み調べた。②元中学校長山田興司著「新島襄中山道の旅」を読み、新島先生が歩いた場所を写真で確認した。③「山と溪谷社」出版の「宿場町と石畳の道『中山道を歩く旅』」を読み、中山道の出入口と距離と宿舎を調べた。

2008年11月1日から埼玉東松山市で開催された「日本スリーデーマーチ」に参加する前に、愛車ヤマハ・ドラッグスター400で京都から安中まで中山道を2日かけて下見した。中山道宿駅制定400年(2002年)を契機に各宿場の本陣などが修理されたり道標などがよく整備されていた。

日程を考えるに当たって最優先したのが、新島先生と同じように学生たちと一緒に歩くことである。1日20kmが最適であるが、学生が休めるのは4/25と5/7が限界かと考えた。新島先生が歩かれた道(長久保く追分は中山道ではなく上田・小諸の北国街道)365kmを、宿舎も考え1日平均28km、13日間で歩く案を作った。

この「新島襄京都・安中中山道ウォーク」案を大学学生支援センターに持って行った。同センターは同志社創立130周年に「新島メモリアルウォーク」ラッシュトランドからアームスト1日16km、5日間を企画・実行した。同センターの広報誌で参加を呼び掛けてもらったが、誰からも問い合わせはなかった。長丁場だから部分参加でもと私の教え子や知人に働きかけたところ、初日と最終日にそれぞれ8人が応募し、延べ13人が参加した。毎日平均28km13日間ぶつ通して歩く。「本当に歩けるだろうか。途中足マメが一杯できて歩けなくなるのでは?」と不安感もあった。そこでリハーサルを2回実施した。1回目は高い標高差のある和

田峠や碓氷峠対策として、大学正門から大文字山と若王子山頂(新島墓参)に登り新島田邸を通って帰る13kmウォーク。同志社教職員合唱の仲間、畷目襄治先生や河村隆夫氏(元大学職員)らと歩いた。元中学校教員の畷目先生は戦時中東京から磯部温泉に疎開し、今でもはつきり覚えている「磯部音頭」の歌と踊りを磯部館で披露したいというのが参加の動機であった。2回目は長距離対策として大学今出川校地から京田辺校地までの35kmウォーク。昨秋大学の学生団体「ウォーキングプロジェクト歩知(ポチ)」が「徒歩通学」として実施し私も参加したコースだ。残念ながら同大生の申込はなかった。第一日目に歩く彦根く関ヶ原23kmウォークに変更し、今回5日間歩く教え子で「*twi child*」会長の岸本展君(京都大学大学院生)と4月18日に歩いた。歩く前にガリゼつきばんそうこうを貼ることで足マメ対策もできた。(中学校社会科・経済の授業「バーチャル株式投資ゲーム」で活躍した生徒の集まり)

その翌日、パソコンを入れた鞆を肩に掛けようとしたら、「あ!……ぎっくり

「新島ウォーク」行程表

1日目	4/25(土)	同志社大学～京都駅→[電車]→彦根～関ヶ原	27km
2日目	4/26(日)	関ヶ原～赤坂～美江寺～加納(岐阜)	30km
3日目	4/27(月)	加納～鶴沼～太田(美濃加茂)	25km
4日目	4/28(火)	太田～御嶽～細久手～大湫～[車]～大井	44km
5日目	4/29(祝)	大井(恵那)～落合(中津川)～馬籠	18km
6日目	4/30(木)	馬籠～妻籠～三留野～野尻	23km
7日目	5/ 1(金)	野尻～寝覚の床～上松～福島	29km
8日目	5/ 2(土)	福島→[電車]→藪原～鳥居峠～奈良井～洗馬	38km
9日目	5/ 3(祝)	洗馬～塩尻～塩尻峠～下諏訪	19km
10日目	5/ 4(祝)	下諏訪～和田峠～和田～長久保	29km
11日目	5/ 5(祝)	長久保～長瀬～海野～小諸	30km
12日目	5/ 6(振)	小諸～追分～沓掛～軽井沢	23km
13日目	5/ 7(木)	軽井沢～碓氷峠～坂本～安中(新島旧宅)	30km



腰だ！」モンブランやマッターホルンに登った時も、直前にぎっくり腰になった。翌月曜日、すぐ主治医の石原整形外科に行き、「先生！土曜日の出発に間に合うよう治して下さい」と。出発の前日、3回目の治療で「もう大丈夫」と先生からお墨付きをもらった。

1日目、出発式を大学・良心碑の前で行った。お祈りとカレッジソングを歌い、雨の中8人は松井会(大学経済学部松井七郎ゼミ卒業生の会)の藤井寛氏に作っていただいた「同志社 新島襄 京都・安中」の旗を先頭に行進した。日経ストックリーグで全国1位になった教え

子樋口靖展君(大学工学部3年次生)もカメラマンとして参加。神奈川県大磯で亡くなった新島先生の棺が京都駅から学生達に担がれて新島旧邸まで運ばれた道(不明門通)万寿寺通)御幸町通)丸太町通)を逆に歩いた。東本願寺やお寺を避けていた。約4km1時間で京都駅に着いた。駅前の食堂で壮行会が行われ、東京から馳せ参じた長尾益夫氏は「同志社90周年の1965年、同志社精神研究会会員5人が安中から京都・同志社まで逆コースを歩いた」と。その後、私と岸本君はJRに乗り、関ヶ原の脇本陣に近い民宿に泊った。

元同志社中教諭・田島さん(京都)

中山道ウォーク 岐阜入り

大同創立者・新島襄の遺徳しのび



同志社大学の創立者で、キリスト教を基にした人格教育に力を注いだ新島襄(一八四三～一九〇三)の遺徳をしのび、新島の歩いた中山道ウォークに添った。同志社中教諭田島寛氏が、京都府伏見区にある同志社中校から、四月二十六日、興入野に降り、不備部原町から岐阜市の加納町まで歩を進めた。

田島さんは、個人で教員に転じた。関ヶ原の戦いの生きた証として、新島先生の遺徳をしのび、同志社中校から、四月二十六日、興入野に降り、不備部原町から岐阜市の加納町まで歩を進めた。

京都一帯馬365°。「功績伝えたい」

同志社中校から、四月二十六日、興入野に降り、不備部原町から岐阜市の加納町まで歩を進めた。

(2009. 4. 28 岐阜新聞)

2日目、岐阜から同志社中学校に通っていた教え子・正村君の父親の口添えで、赤坂宿の名家・矢橋邸を見学させていただいた。旅人をもてなす立派な茶室があり、家訓の「陰徳を積む」という当主の話が印象的であった。加納宿本陣跡の和宮仮泊所前で岐阜新聞の記者からインタビューを受けた。2日後に大きな記事で掲載された。同志社岐阜県人会の方々には大変お世話になった。新島先生は旅日記「日抄」で、「岐阜ノ人家ハ凡1万戸、大垣、岐阜、加納ヲ伝道地トナスベシ」と書いている。新島先生のこの旅の目的はキリスト教の「伝道」であると分かった。

3日目、うとう峠を越え立派な中山道会館のある美濃加茂市の太田宿に到着。ここは昭和62年に第1回中山道宿場会議が開催された地で、中山道宿駅制定400年を契機に自治体や地元が協力して街道を整備し活性化に努めている。特に岐阜県では「中山道 歴史の道」の道標がたくさん設けられ、道に迷うことはなかった。美濃加茂市は製造業が盛んで、市民の1割強が外国人。駅前ビルにはブラ

ジル人学校があり、日系ブラジル人高校生は「早く仕事に就きたい」と。

4日目、中山道みたけ館に入った。「日本最古のゾウ発見」「桃山時代駱駝が来て見物人もビックリ」と地元テレビがビデオ撮影。御岳山は雪深く、小川にはセキレイや山吹、庭先には芝桜やツツジ、テッセン。空には鯉職が泳ぐ。隠れキリシタンの遺物が発見された謡坂の石畳で昼食を食べ、岸本君に「腰は今のところ大丈夫」と電話し立ち上がりとうしたら、「あれ！腰がぎっくり腰？」腰を気づかいながら、中山道の難所・琵琶峠を越え、大湫宿に着いた。ここで泊まる予定であったが、岐阜県人会のゴルフ懇親会が恵那であると聞き正村氏に車で送ってもらった。宿舎で持参した痛み止め薬を飲んだら、腰がシャンとした。

5日目、大井宿（恵那）「山路来て何や羅遊かし寿み蓮草」（はせを）。八重桜は今が満開であった。木蓮、ボタン、アシビ、ポピー、チューリップ、シャクナゲ、花菖蒲：百花繚乱だ。御岳山が見える麓では娘さんが田植え機を操縦。絵になる風景だ。落合宿（中津川）で東海道

五十三次を完歩した田島豊（弟）が応援に駆けつけ3日間一緒に歩いた。新島は「中津川ニテ伊勢氏疲労シ歩行スル能ワス。予モ亦少シク疲レタレハ、荷馬二ノリ妻籠ニ至ル」と。先生方は大分疲れが出てきて、この辺りから荷馬車や人力車に乗ることが多くなった。私も、初めは苦しい旅になるだろうと思っていたが、花を愛でのどかな田園風景を見ながらゆつくり歩いたら「贅沢な旅だなあ」と思いは逆転した。

馬籠では但馬屋に泊った。夕食時、外国人と日本人が半々だった。食後、フランス人家族7人が囲炉裏を囲んでいた。パリに住む両親を昨年は京都・奈良に、今年は馬籠・妻籠に招待。8時から始まる木曾節の民謡と踊りの講習を待っていた。私は「モンブランに登



頂しバリも訪れた。好きなシャンソン歌
つてもいいですか」と。「リラの花咲く
頃」と「愛の讃歌」を歌い、7人はフラ
ンス国歌を歌い楽しく交流することがで
きた。

6日目、馬籠から妻籠は天候に恵まれ
た。スイス人カップルに会い「昨夜シャ
ンソン聞きましたよ」と。空気が爽やか
で、枝垂桜や藤の花がきれいだった。国
の重要伝統的建造物群保存地区第一号に
指定された妻籠から、恵那山を見ながら
馬籠の石畳を歩き、「藤村記念館」を訪
ねるのが今や修学旅行のコースになり、
昨秋九州の中学生たちに会った。馬籠は
明治と大正の大火で伝統的建造物は焼失
し保存地区には指定されていなかった。

7日目、寝覚の床にある「越前屋の寿
命そば」。蕎麦好きの新島先生は「寝覚
ノ蕎麦、予直ニ8杯ノ蕎麦ヲ喫セリ」と。
「蘇峰自伝」には「先生は食物には頗る
趣味があった。特に蕎麦となれば命さへ
打込む程であった。偶々寝覚めの床にて、
予と先生と名物蕎麦の賭喰ひをした。先
生が9杯の時に、更に半杯を加へた為
に予の勝となつて、蕎麦代を先生に払はし

めた」と。創業300年の越前屋には明
治時代の風景写真が掲げてあった。新島
先生もこんな馬車や人力車に乗ったので
あろう。

東京・日本橋から教え子と一緒に歩い
てきた大柄な先生に会った。「これから
何回かに分けて京都まで歩く」と。リタ
イヤした人たちと話をすると、①日本百
名山登山、②四国八十八箇所霊場巡り、
③東海道五十三次など「街道を歩く」こ
となどに「夢・楽しみ」を持っている人
たちに出会う。「中山道六十九次を歩く
こと」もリタイヤした人の挑戦対象に。
これでほぼ半分歩いたことになる。「天
下の四関」と言われた木曽福島で弟と別
れた。

8日目、鳥居峠には野鳥が多く名古屋
から早朝やつてきた人と歩いた。1、1
97mの頂上に芭蕉句碑「雲雀よ里うへ
にやすらふ嶺かな」。険しい峠だろうと
思っていたがよく整備され歩きやすかつ
た。妻籠同様、上記保存地区に指定され
ている宿場風情満点の奈良井宿に着い
た。「奈良井宿記念切手」が発売された
というので、1シート買い便りを出した。

9日目、昭和25年から発掘され、登呂、
尖石と共に当時「日本三大遺跡」と言わ
れた平出遺跡（縄文・平安時代5千年の
複合遺跡）と「縄文の村」を見学した。

「縄文人と数」など展示が工夫され面白
かった。冠雪の北穂高や常念岳など北ア
ルプスの山々が見えた。農作業のおじさ
んは「雪形を見て田植えなど農事を行う。
塩尻ワイン・メルローは02年国際ワイン
コンクールで金賞を取った」と。塩尻峠
展望台からは正面に諏訪湖、左に八ヶ岳、
右に北岳、中央奥に富士山が見えた。甲
州街道と中山道の合流する下諏訪宿に到
着した。

「下諏訪宿。我輩ノ泊セシ所ハ亀屋ト
称シテ一新講ノ宿ナリ、温泉場アリ。此
日、安息日ナルヲ以テ休息ス」「亀屋」
は今「かめや」となり、昨年NHK大河
ドラマ「篤姫」で話題となった和宮降嫁
の行列絵巻や和宮の宿泊した「上段の間」
が展示されていた。「日曜日だから休息
す」とはさすが筋金入りの宣教師である。

10日目、中山道で一番高い峠が和田峠
（古峠で1,531mだ。狭くて急な坂
道である。「伊勢ト余ハ荒神ニ乗り、未

夕山ノ頂上ニ二達セサル内雲霧起リ、頂上ニ近寄レハ途ハ益嶮艱、登リハ弥危急又風烈シクシテ傘ヲ用ユル能ワス」と。風雨激しく艱難を極めた。先生はなぜ長久保から中山道の笠取峠を通らず長瀬に方向転換したのかが分かった。「和田ニテ人力5台ヲ雇ヒ、笠取峠ノ手前ニ来リ、望月迄行カントセシニ、峠ノ艱嶮ナルヲ以テ途ヲ枉ケ、山ノ裾ヲ回リ長瀬ト云一小村ニ投宿ス」と。笠取峠は標高約800mでそんなに高くないが、和田峠での散々な目に合ったことが尾を引いたと思われる。

長久保宿本陣跡は中山道中最古の本陣で非公開であつたが、宿の女将の紹介で見学させてもらった。加賀や丹波、対馬など多くの大名の看板があつた。真田幸村が関ヶ原の戦い後の蟄居中「娘をよろしく」と石合家に当てた書状も見せてもらった。司書になる大学生が毎年夏に古文書解説のために来ると案内してくれた石合家当主は言つた。宿に戻り風呂に入つていたら急に激しい雷雨の音がした。11日目、新島先生は雨で険しい笠取峠を避け、迂回して長瀬・北国街道を歩い

た。長瀬は長野新幹線が通り今は新興住宅地となり古い建物はほとんどなかった。JR大屋駅で岸本君と再会。千曲川に沿つて歩くと海野宿があつた。「卯建」という言葉に興味を抱き資料館に入った。蚕の卵を輸出して大儲けした人が「卯建」の家を建てたので「うだつが上がる」という言葉になった。金を佐渡から直江津・長野・小諸に運ぶルートとして「北国街道」ができたなど興味深い話を聞くことが出来た。商家など古い建物がよく保存されていて、「日本の道百選」にも選ばれた人気度の高い宿場町である。

小諸で懐古園の中の「藤村記念館」に入った。島崎藤村はクリスチャンとなり明治学院卒業後小諸義塾で英語と国語を教えた。「椰子の笑」は藤村が柳田國男の話の聞き作詞し、同志社出身の大中寅二が作曲した。「破戒」は藤村の隣に住む小学校校長大江磯吉の話の聞き、小諸義塾を辞めて東京で書き上げた。「聞き上手は三文の得」です。

12日目、小諸を出発する時雨が降り始めた。北国街道と中山道の分岐点「分去

れ」に着いた時は7℃と寒く枅形茶屋でソバを食べた。「小諸ヨリ馬車二乗リカエ輕井沢ニ至リ名物ノ蕎麦ヲ喫ス」。新島先生も蕎麦を食べたが、もう蘇峰と「賭喰ひ」はしなかつた。

輕井沢のペンションで敵目先生や河村氏と合流した。同志社シーモアハウスと今の天皇が美智子さまと出会つた輕井沢テニスコートを見た。宿舎に戻り、明日磯部館で披露しようと、敵目先生が疎開中磯部温泉で覚えた「磯部音頭」の歌と踊りをみんなで練習した。

13日目、今日も雨だつた。30km歩き、午後5時頃新島旧宅に着くために午前8時に宿舎を出発した。碓氷峠は長野と群馬の県境にある熊野神社(標高1,200m)から坂本宿まで高度差が約750mもある急な下り坂である。「伊勢ト余ハ例ノ荒神ニノリ碓氷峠ヨリ坂本ニ至ル。坂本ヨリ馬車ニノリ、其夜8時安中ニ着ス」と。安中から碓氷峠を上り熊野神社まで7里余り(約30km)を走る「安政遠足」(待マラソン)は日本マラソンの起源といわれ、3日後に待などに仮装したランナーがこの峠を駆け上る。

坂本宿では「横浜熟年マラソン駅伝」の方々と会った。平均年齢70歳、京都から日本橋まで中山道を3回に分けマラソンリレーする。今日は佐久市岩村田から高崎、明後日に日本橋にゴールする。「70歳で中山道53.7kmを9日間で走破」とは凄いなあとエールを送った。日本で初めてアプト式鉄道が開通した横川駅に着いた。「峠の釜めし」で有名なが、97年長野幹線開通で信越本線が廃止。軽井沢にはバスに乗り換えねばならず客足が減った。



松井田で「同精研」の仲間3人が加わり、7人で新島ウオークの旗を掲げゴールの安中・新島旧宅に向き歩いた。立派な門構えの半田隆一氏の家があった。第1回新島ウオークの関口徹氏はここに泊めてもらい、新島裏の遺髪

と硯を見せてもらったと。「日本マラソン発祥の地・安中」という幟があった。もうゴールは間近だ。レインコートを脱いだ。新島旧宅の前には多くの人が待ち構えていた。5時25分、新島学園の教職員や松井会の人達と握手しながら、ついにゴールした。

新島学園中高の市川平治校長が上毛新聞の記者を紹介。私は感想を聞かれ、「135年前に新島先生が教え子と一緒に歩いた同じ中山道を、今教え子や同僚、「同精研」の仲間達と一緒に完歩することができ大変うれしい。新島先生やりましたよ」と。

翌日、上毛新聞に大きな記事で紹介された。

私の希望で新島学園のパイプオルガンを見せてもらった。学校関係では全国屈指と言つてよいだろう。この素晴らしいスイス製のパイプオルガンの伴奏で、新島先生の愛唱歌、讚美歌21の227番「主の真理は」を校長先生始め参加者全員で合唱でき最高に嬉しかった。

新島先生から洗礼を受けた湯浅治郎や柏木義円牧師らが創設した安中教会を訪



れた。この新島ウオークでもお世話になった五味一牧師や教会員の方たちと交流することができた。安中教会で柏木義円牧師から洗礼を受けた松井七郎先生の生家を訪れ、墓参することによってこの旅は終わった。

【プロフィール】

田島 繁（たじま・しげる）

1943年 名古屋生まれ

1966年 大学経済学部卒業

1966年 桜美林高校社会科教師

1968年 同志社中学校社会科教師

論（経済担当）

2008年

同退職